

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：27602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10246

研究課題名（和文）神経難病患者における生命活動としての 運動と休息 の看護学的概念の可視化

研究課題名（英文）Visualization of the nursing concept of "exercise and rest" as vital activities in patients with intractable neurological diseases

研究代表者

山岸 仁美 (Yamagishi, Hitomi)

宮崎県立看護大学・看護学部・特任教授

研究者番号：30185863

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：神経難病は、自律的な運動や活動が障害される進行性の病態である。患者は自身の意志で生活を創りだすための日常生活に他者の支えが不可欠である。本研究は、筋萎縮性側索硬化症（ALS）、筋ジストロフィーのある患者を主な対象として、看護師の知識や経験、直感などに基づいて、運動と休息に焦点を当て、どのように看護上の判断やケアがなされるか、その構造の可視化を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

神経難病患者の“より健康的な運動と休息”の在り方とはどのようなものか、看護学的概念と突合させた検討を重ね、看護の役割を發揮できることを目指す。

研究成果の概要（英文）：Incurable neurological diseases are progressive diseases resulting in the impairment of autonomous movement and activity. For patients with such diseases, the support of others is essential for establishing their own daily lives. The aim of this study was to extract characteristics of nursing judgment and care, focusing on “exercise and rest”, both of which are inherently connected to vital activities, and group-focus interviews were conducted with nurses with more than half a year of experience caring for patients with incurable neurological diseases.

研究分野：理論看護学

キーワード：神経難病患者 生命活動 看護学的概念 運動と休息

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

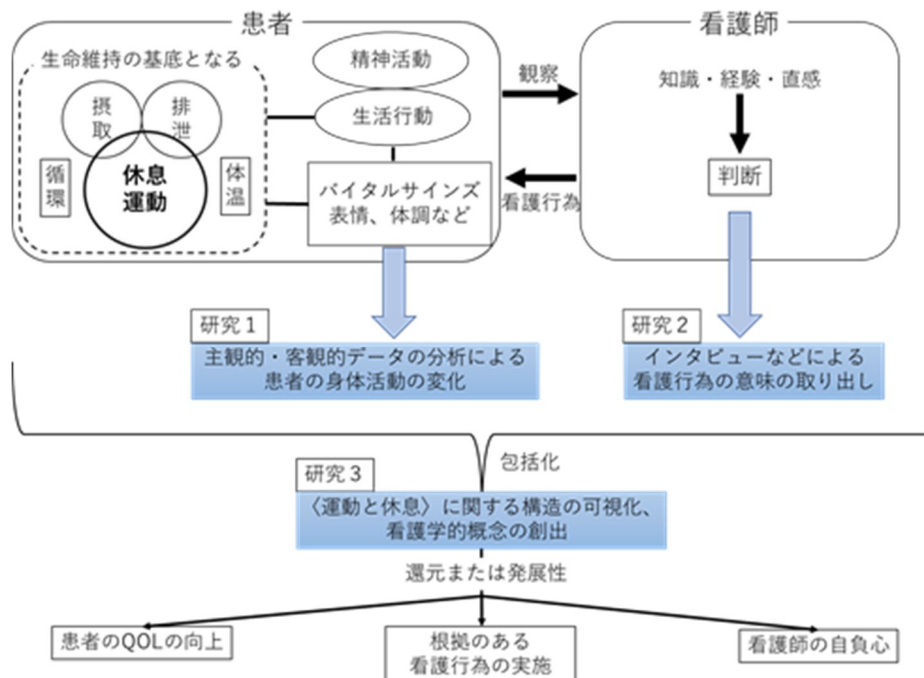
1. 研究開始当初の背景

神経難病とは、中枢神経や筋繊維などの変性により、自律的な運動や活動が著しく障害され、患者は、療養生活において他者からの介助を必要とする。看護師は、患者の身体機能をアセスメントし、生活行動の支援を行う。さらに、病態の進行性という特性において、日々の身体活動に変動がみられ、常に体と心の調和を図る観点から、運動と休息 摂取と排泄 個人と社会の適切なバランスを意識した細やかなケアが必要とされる。

人間を生物体の側面から捉えると、生命を維持することの根底には、物質代謝の摂取・排泄が存在し、その働きは、生命活動を含む 運動と休息 に深い関りがある。これらの質の向上は、生活の質に直接的に関与すると言われる。また、摂取と排泄 運動と休息 は、それぞれ対極的な存在であり、“バランスを維持する”ことは生命維持に不可欠となる。

看護ケアは、看護の知識や経験のみならず、看護師個人の直感や思考が反映されたものである。自律的な身体活動を障害される神経難病患者は、基本的な看護ケアとなるベッドのギャッジアップ、体位変換においても身体負荷の要因と成り得る。日々変動する身体活動を考慮した細やかなケアは、運動と休息 のバランスを保つことにつながり、摂取と排泄、循環などの生命活動を支えることと同時に、長期間の療養生活に潤いを与えるものとする。

本研究の目的は、神経難病患者を対象に、生命活動の維持を含む身体活動の実態について把握すると共に、看護師の知識や経験に基づき、どのように看護上の判断やケアがなされるか、その構造を可視化し、“より健康的な 運動と休息 ”の在り方を検討することである。



2. 研究の目的

神経難病患者を対象に、生命活動の維持を含む身体活動の実態について把握すると共に、看護師の知識や経験に基づき、どのように看護上の判断やケアがなされるか、その構造を可視化し、“より健康的な 運動と休息 ”の在り方を検討する。以下、詳細について記述した。

(1) 看護ケアに伴う患者の主観的・客観的情報と看護師の判断過程との関連性を明らかにする。

看護師の経験や知識、直感を内包した看護ケアについて、患者に生じる影響を多角的に解析し、看護の判断過程の構造と合わせることで、看護の専門性を再確認する。

(2) 神経難病の患者における 運動と休息 の構造を可視化し、看護学的概念について検討する。

看護ケア場面における看護師の判断過程を丹念に記述し分析することにより、生体活動の基盤となる運動と休息の看護学的概念について、臨床的活用を視野に適用性を高める。

3. 研究の方法

(1) 体験学習における看護大学1年次生の看護観の形成過程

看護大学1年次生が、神経難病患者の生活環境下の実習において、どのような事象に着目し、看護観につながる認識が形成されているか、3年分を分析しその特徴について明らかにすることを目的とした。着目した事象の特徴、事象から看護観の形成につながる認識の特徴を明らかに

した。実習の記録物である印象に残った・共有したい場面を記述したラベルの 264 枚、24 名の 3 年分の記録を対象とした。学生が注目した事象・感じ考えたことの特徴を明らかにし、看護観とのつながりを検討した。

(2) 神経難病患者の生活環境下での体験学習における対象像

神経難病の患者が療養するフィールドにおける学生たちの対象像の広がりについて、実習記録の分析を行い、どのような要素があるか考察した。対象像については、「認識をもつ有機体が社会関係の中で互いにつくりつくられていく存在」という人間観に則り、実体・認識・社会関係・生活過程への視点が浮き彫りになるように枠組みをつくり、学生が描いた対象像の特徴を分析した。

(3) 神経難病患者のケアに伴う看護師の判断過程

神経難病患者を受け持った経験年数半年以上の看護師を対象とした。研究者は、5 名前後のグループをつくり、食と排泄 運動と休息 に焦点を当て、看護実践についてインタビューした。神経難病患者にかかわる看護師が知識や経験、直感などに基づいて、どのように看護上の判断やケアをしているか、看護場面を分析し、その特徴を取り出した。

(4) 看護ケア（背部温電法）に伴う対象の身体活動についての主観的・客観的情報のデータ化

看護ケアに伴う患者の身体活動に関する主観的・客観的情報の収集における基礎的情報の位置づけとして、健康な成人 7 名に対して腰背部温電法を実施した。その際、サーモグラフィーを用いて皮膚の表面温度を計測し、個別に分析した。

4. 研究成果

看護観が形成されていく過程には、学内講義で看護学的概念を学習するだけでなく、体験学習を重ねることが不可欠である。まず、研究を進めていくにあたり、神経難病患者の生活環境下の実習における看護大学 1 年次生の看護観の形成過程について調査した。実習の記録物である印象に残った・共有したい場面を記述したラベルには、学生が関りを通して得られた対象についての具体的な事象が記述されていた。

看護観の形成につながる事象として、以下の分析内容が見出された。「難病により生命力が消耗され、患者自身が体の衰えを実感する極限の状態でありながら、自分らしさを失わずに、生活に工夫を取り入れ、夢や希望を願うという人間としての力」、「命を守り、心地よい生活を創るために、他者にゆだねる日々の中で、その人の信念を貫く強い生命力」、「ケアの創意工夫に自負心をもつ医療者に、日常生活動作を代行されることにより患者自身が願う生活を創り出す」である。この内容は、3 年分に共通してみられたことを確認した。これらは、学生の間観・生命観・生活観に深みを増し、看護観を形成する要素になったと考えられた。

学生は、神経難病患者との関わりにおいて、驚きや苦しさなどの感情の揺らぎを伴いながら、人間のもてる力に気付いていた。そして、学生が体験した看護現象について、学内講義で学んだ概念に照らして医療における看護の役割を意味づけていた。

次に、神経難病患者の生活環境下での体験学習における対象像について、ラベルの内容から分析した。神経難病患者が生きていく現実と直面した学生は、感情の揺らぎを伴いながらも、実体・認識・社会関係・生活過程への現象を豊かにし、対象像が広がったと考えた。文脈単位には、実体・認識・社会関係・生活過程のうち、単一の視点だけではなく、複数がそれぞれ絡み合った視点として存在した。学生は、体験学習の具体的な事象から、患者をさまざまな力をもっている人間として見だし、それに伴い、学生が描いた対象像は変化したと考察された。

神経難病患者のケアに伴う看護師の判断過程について、看護師の判断過程による語りを基に分析した。神経難病は進行性の病態であり、患者と家族が願う生活の実現のために、日常生活において他者の力を活用することの意味を患者と共有していた。さらに、日々の細やかなケアにおいて、神経難病患者の生命活動に関する適切なバランスをとるための技を生み出す努力をしていた。そして唯一自由に表現できる患者のニーズをできるだけ満たそうと取り組むことが、看護する原動力となり、個別に合わせたケアが展開されていたことが明らかとなった。このような判断過程をもつ看護師によるケアは、神経難病患者にとって、生命力の消耗を最小にして患者のニーズに即した生活を創り出す、つまりより健康的な＜運動と休息＞のバランスを生み出していることが推察された。

なお、本研究課題においては、神経難病患者を対象に、生命活動の維持を含む身体活動の実態について把握すると共に、看護師の知識や経験に基づき、どのように看護上の判断やケアがなされるか、そして看護ケアに伴う患者の身体活動についての客観的情報を収集し、主観的情報と統合した分析を行う予定であった。

しかしながら、COVID-19 の感染拡大の影響により本研究課題の遂行にあたり活動に制限が生じた。そのことにより、一部研究計画の変更が生じた。

看護ケアに伴う患者の身体活動に関する主観的・客観的情報の収集における基礎的情報の位置づけとして、健康な成人 7 名に対して腰背部温電法を実施した。その際、サーモグラフィーを用いて皮膚の表面温度を計測し、個別に分析した。腰背部温電法実施中後のいずれかで、各皮膚表面温度が上昇したことを確認し、さらに温まり方などの個別性が画像にて明確となった。

本研究課題は、神経難病患者を対象に、生命活動の維持を含む身体活動の実態について把握すると共に、看護師の知識や経験に基づき、どのように看護上の判断やケアがなされるか、その構造を可視化し、“より健康的な運動と休息”の在り方を検討することを目的としていた。

COVID-19の感染拡大の影響により対象患者へのケアについて生理学的な客観的データの収集を行うことができず、研究計画に修正が生じたが、一部の内容については達成することができた。

神経難病患者の生活環境下の実習における看護観の形成過程と、神経難病患者の対象像の広がりについてその構造を知ることができた。また、神経難病患者を受け持った経験年数半年以上の看護師を対象としたインタビューの実施により、看護場面から看護上の判断やケアを行う上での判断過程について明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藏元恵里子、山岸仁美	4. 巻 27(5)
2. 論文標題 神経難病患者のケアに伴う看護師の判断過程	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 難病と在宅ケア	6. 最初と最後の頁 10-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藏元恵里子、山岸仁美	4. 巻 35(8)
2. 論文標題 神経難病患者の 運動と休息 における看護学的視点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 BIO Clinica	6. 最初と最後の頁 96-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 藏元恵里子、山岸仁美
2. 発表標題 在宅における神経難病患者の生活行動の適切なバランスを維持するための看護師の判断過程
3. 学会等名 第26回日本難病看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林恵理子 山岸仁美
2. 発表標題 神経難病患者の生活環境下での体験学習における対象像の広がり
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Eriko Kuramoto, Hitomi Yamagishi
2. 発表標題 A narrative analysis of the decision-making processes of visiting nurses for patients with intractable neurological diseases
3. 学会等名 24nd East Asian Forum for Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藏元恵里子、山岸仁美
2. 発表標題 神経難病患者のケアに伴う看護師の判断過程
3. 学会等名 第25回日本難病看護学会学術集会・第8回日本難病医療ネットワーク学会学術集会合同学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藏元恵里子 山岸仁美
2. 発表標題 体験学習における看護大学1年次生の看護観の形成過程～神経難病患者の生活環境下での実習を通して～
3. 学会等名 日本看護研究学会第45回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Eriko Kuramoto, Hitomi Yamagishi, Mamiko Hidaka
2. 発表標題 “What is nursing?” : The formation of nursing students' view of nursing through experiential learning
3. 学会等名 22nd East Asian Forum for Nursing Scholars 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	藏元 恵里子 (Kuramoto Eriko) (30765839)	宮崎県立看護大学・看護学部・講師 (27602)	
研究 分担者	日高 真美子 (Hidaka Mamiko) (00816168)	宮崎県立看護大学・看護学部・助教 (27602)	削除：2019年3月8日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------